

# 2006年5月の訪島に見る粟島の植物記

石 沢 進

粟島の植物については、池上義信先生の詳しい調査により、1972年に「粟島の植物」(1)としてまとめられている。その調査の際、2回ほど先生に同行して島内を見て歩く機会があり、それ以来粟島の植物の分布状況に関心を持っている。その後、数回粟島を訪れて、若干の植物について追加をしている。しかしながら、植物の変遷についてそれほど意識しないで見過ごしていたが、2006年5月一泊二日の訪島で昔の様子と随分変わった印象を強く受け、30数年間に植物相の変化が起きていることに気づき、その一端をここに紹介する。島内でも内浦付近を見ただけの旅であり、また、植物の調査を目的としていたわけでもないので、詳細については更に調査が必要である。

## 1) 帰化種の繁茂

1972年の記録と大きく異なっているのは、人の生活圏との関わりがあり、中でも往來の激しい港周辺で見られる帰化植物の繁茂にある。

内浦の周辺のタンポポは、30数年前には在來の種で占められ、外來のタンポポは一本も無かったが、現在ではほとんどがセイヨウタンポポ(写真1)に変わり、アカミタンポポ(写真2)も一部に生育し、まれに在來種が生えている。もちろん、人の往來の激しくない山中では、在來のタンポポが生育している。

タンポポと同じように量的に繁茂しているのが、ヒメオドリコソウ(写真3)であり、各所に群生している。本種は粟島だけでなく、ここ10数年の間に県内各地で爆発的に広がっているのが、粟島でも例外でないことかもしれない。訪島が春であってはっきりしないが、秋には30年以前には見られなかったセイタカアワダチソウ(写真4)が広がっていると推察され、その芽生えが各所に生育している。

また、フラサバソウ(写真5)と呼ばれている植物が、内浦の住宅街、公園、道路沿い、畑地に広く見られたのも極めて印象が深かった。以前は全く生えていないし、離島の佐渡で群生している状況を見ているが、越後では、その生育を、私自身まだ確認していない。港の公園や住宅街には、以前見られなかったミチタネツケバナ(写真6)、コメツブツメクサ(写真7)、マンテマ(写真8)、ハルジオン(写真9)、アライドツメクサ(写真10)などが生育している。中でもミチタネツケバナは、至るところに見られ、分布を拡大しているようである。コメツブツメクサ、マンテマはまだ開花前であり、この旅では量的なひろがり

を十分に確認できなかった。

園芸利用を目的に導入された種で野生化したものには、ツルマンネグサ(写真11)やアジュガ(写真12)(訪島中に会った島民の方はジュウニヒトエと呼んでいた)などが見られた。

## 2) 生育を確認した種

今回の旅で生育を確認した植物は以下のようである。コウボウ(イネ科)以外はいずれも外來種であり、詳細な年間にわたる調査でさらに帰化種の追加の可能性が高い。

ナンデシコ科	マンテマ アライドツメクサ
ベンケイソウ科	ツルマンネグサ
アブラナ科	ミチタネツケバナ
マメ科	コメツブツメクサ (シロバナヤハズノエンドウ)
シソ科	ヒメオドリコソウ、アジュガ
ゴマノハグサ科	フラサバソウ
キク科	セイタカアワダチソウ、セイヨウタンポポ、アカミタンポポ
イネ科	コウボウ(写真13)

## 3) 絶滅危惧種のウラジロガシの消失

ウラジロガシは粟島が分布の北限であることから、新潟県のRDBでは地域個体群としてランクされているが、最後に残っていた内浦宮口下の生育地は畑に開墾されて消失してしまっている(写真14)。粟島を訪れる度に何処かに生育していないか見ているが、まだ確認していない。今回も宮口下付近を散策してみたが、新たな個体の生育を確認できなかった。

## 4) 自然災害に伴う植物の消失

粟島は、昭和39年(1964)6月16日の新潟地震で、2mほど隆起するという大きな環境の変化もあり、その影響により、水脈も変化するなど水田耕作が次第になくなり、水田に生育する植物が消失した可能性も高く、地震に伴って変化している一面もある。海岸線に以前見られた種も現在確認できない種も多く、自然災害に加えて人の土地利用の影響も大きい。ショウノミヤに生えていたオオクグや保ノ浦・角浦浜に生えていたシオクグなどの消失は自然災害による例であろう。現時点で分布している粟島の植物を見直す必要を感じた。

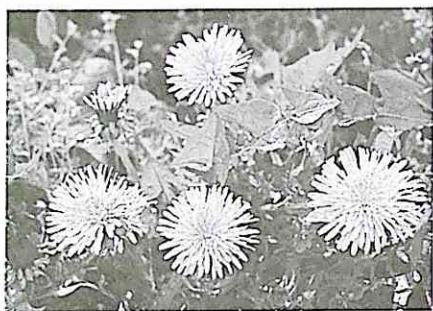


写真1 セイヨウタンポポ

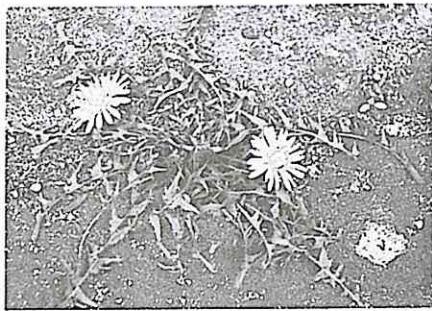


写真2 アカミタンポポ

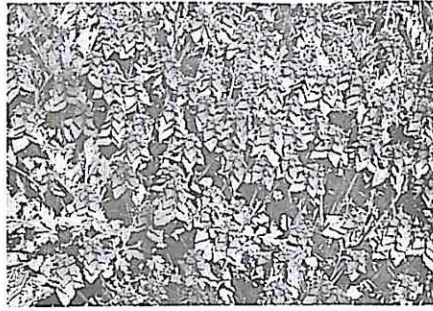


写真3 ヒメオドリコソウ



写真4 セイタカアワダチソウ

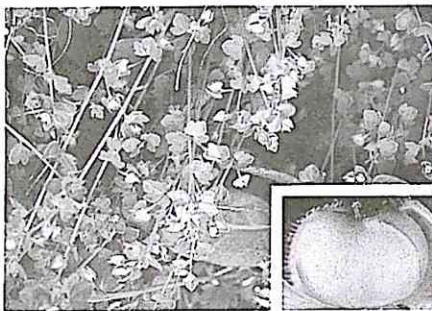


写真5 フラサバソウ

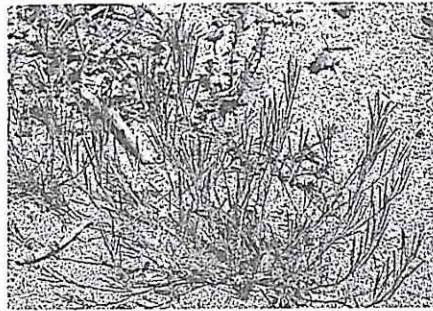


写真6 ミチタネツケバナ

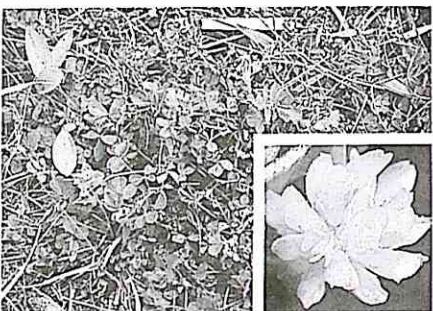


写真7 コメツブツメクサ

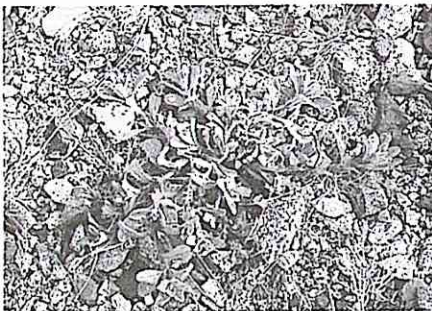


写真8 マンテマ



写真9 ハルジオン

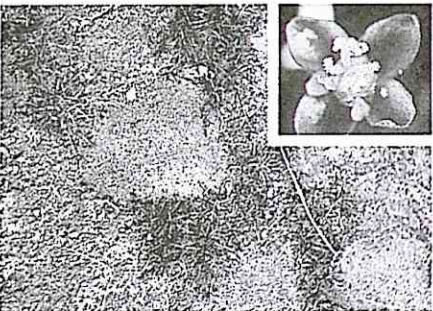


写真10 アライドツメグサ

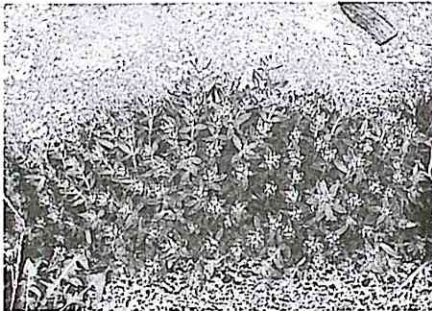


写真11 ツルマンネングサ



写真12 アジュガ

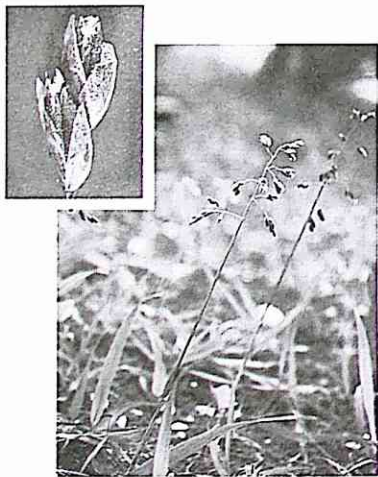


写真13 コウボウ



写真14 ウラジロガシの生育地開墾で消失

### 5) ブナの再確認 (写真 15~17)

栗島にブナが生育していることを調査し、それについては、まとめて報告してある。本数が少ないので、その生存には配慮してほしいものである。今回もその生育地を尋ねて新葉を展開したブナとの出会いができた。2005年はブナの豊作年であり、栗島のブナは、どうであったか気に止めていた。もし実が熟していれば、実の芽生えが始まっているはずであると思い、樹の下を丹念に観察したら何本かその生育が確認できた。次代のためにこれらの実生が順調に生育できるか心配である。生育地の林床はかなり暗くて実生の生育には、光不足で途中で消失してしまいそうである。あまり人手を加えるのも自然の摂理に逆らうことになりそうであり、その消長を見守りたい。



写真 15 ブナ高木



写真 16 ブナ高木



写真 17 ブナ実生

### 6) 野生種の栽培

前回の調査時には見られなかった野生植物の利用にも変遷があり、山菜として民宿の食卓にのせる機会が多くなっ



写真 18 ウド

たためと思われるが、野生植物の栽培が盛んになっているようである。特にウド (写真 18) やタラノキ (写真 19) の栽培が目立つ。畑の脇や樹林の縁などに植えられており、以前には目にする事がなかったが、至るところに栽培され、ウドなど住宅街の空地にも植えられている。住宅脇にクサソテツ (写真 20) を植えているところも見かける。散策路の道路脇に「タラノメ保護のため、採集しないように」との看板を見かけるようになってきている。



写真 19 タラノキ



写真 20 クサソテツ

### 植物種の変化を調べる必要性

1972年に池上先生がまとめた時点でも、生存が確認できなかった植物もある。例えばコチャルメルソウ、オオバセンキュウ、アキノタムラソウ、クマガエソウなどがある。池上先生のまとめた栗島の植物相は、1972年以前に分布していたすべての種をリストアップしたものであり、まさに栗島の植物の総体を明らかにしている。まとめてから30数年経過しているので、その後の栗島の植物の実態を明らかにしておく意義は大きい。特に第二次大戦後の急激な人間生活の変化に伴って植物相にも大きな影響を与えているように思われる。人の生活基盤である地域の自然環境について、時の流れに伴って常に関心を持って明らかにしておくことは、次世代のためにも大切なことである。植物からみた栗島の変貌について、現時点でその実態を把握しておく必要を強く感ずる旅であった。

(1)池上義信. 1972. 栗島の植物 新潟県文化財調査年報第11「栗島」:139-214. 新潟県教育委員会